

神のおとずれ

日本聖公会 神戸教区報



2021年
12月号
クリスマス号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
<https://www.nskk-kobe.org/>

発行責任者
司祭 上原 信幸

印刷所
文明堂印刷所

The King of Kings

司祭 バジル 八代 智



と聞けば、今年逝去三〇年を迎えた親父を思い出します。生前、親父が愛飲していたスコッチ・ウイスキーで、独特の陶器のボトルをご記憶の方も多いかと思います。

明治維新以降、日本に初めてウイスキーが輸入されたのは一八七一年といわれてお

り、今年で丁度一五〇年を迎えますが、その時すでに「The King of Kings(キング・オブ・キングス)」も一緒に輸入されたとされています。日本がバブルの絶頂期、この「The King of Kings」も高級ウイスキーとして、全国のお店に並んでおりましたが、今から四〇年ほど前に製造が中止され、今では極めて貴重な一品とされています。

以前ある方からこのウイスキーを頂戴して非常に懐かしい記憶とともに、笑顔でグラスを傾ける親父を思い出した次第です。十二月に入り、わたしたちは御子イエスのご誕生を待ち望むアドベントを迎えました。わたしたちが待ちつづけるイエス・キリストもまた「The King of Kings」と言われ、世界中で崇められています。これまで一体、世界中でどれほど多くの王様が主イエスのシンボルである十字架の前で宣誓したでしょう。一体どれほど多くの男女が、この十字架を前にして永遠の愛を誓い合ったことでしょうか。一体どれほど多くの人々がその前で洗礼を受け、そして十字架を仰ぎつつ天国へと旅立ったことでしょうか。

今年用いた聖書日課B年最後の福音書は有名な主イエスのエルサレムご入城の物語ですが、この物語の中に主イエスが神様から与えられた使命が明確に現されています。当時のイスラエルはローマ帝国に占領統治された状態で、ユダヤ人の誰もがイスラエルの黄金時代を築いたダビデやソロモンのような逞しい王様、につくきローマ帝国を駆逐してくれる最強の王様の到来を待ち望んでおりました。従って主イエスをご入城された時、エルサレムの大群衆はかつてのダビデ・ソロモンの凱旋帰国よろしく棕櫚の葉をかざして「ホサナ・ホサナ(万歳)」と叫びつつ、歓喜のうちに主イエスを迎え入れたのです。

とはいえ主イエスがエルサレムにお入りになった時、群衆や弟子たちでさえ「アレツ」[王]を迎えるべく、アドベントのこの節に、それぞれの心の中でふかふかの飼葉桶を用意したいものです。

それゆえ二千年後の今も尚、世界中で二十億以上の人々がイエスの事を「The King of Kings」と称えているのです。私たちが「王の中のまことの王」を迎えるべく、アドベントのこの節に、それぞれの心の中でふかふかの飼葉桶を用意したいものです。

神戸聖ニカエル教会主日勤務
八代学院理事長

特集 フィリピンの クリスマス

マニラでもセブでも、十月になれば巷にクリスマスの装飾が増えはじめ、町行く人々の間にいやがうえにもクリスマスの雰囲気が始まります。フィリピンは「世界で最も早いクリスマス」が祝われると称される所以です。一方、人々がクリスマスを祝う宗教的雰囲気は同一でも、都会を離れ聖公会の中心地コーデリア山岳地帯の村々には、教会生活を締めくくる静かで豊かな日々(特に夜)が訪れます。都会でも田舎でも、必ずクリスマス前に飾られるのが「パロル」(星の形をしたデコレーション)です。都会では大きな星形の中にイリュミ

ネーションが輝き、貧しい村でもそれなりに竹で作った星形の骨組みに紙を貼ったなかなか立派なパロルが、家の梁や竹林にひるがえります。私は長い間、パロルはフィリピンに独特のものと思っていましたが、スペインに行った時に、同様のものを見つけ、これが実はイスラム王国(アングルス)がイベリア半島を支配していた頃、イスラム文化圏から移植されたものであったことを知りました。

不思議なことにイスラムの文化でも中国の伝統でも、パロルは「将来の希望」の象徴で、クリスマス飾りとしてのパロルも「希望の星」と呼ばれていました。幸福でも不幸でも、豊かでも貧しくとも、クリスマスの夜の星は人々を、清らかな「希望」に導くのでしよう。

イベリア半島で失地回復したカトリック勢力が、これを経たクリスマス飾りとして用いたのでしょう。時は「大航海時代」、イザベラ女王がマジエラエス遠征艦隊を支援し、艦隊がセブ島に到達し、カトリック教会の宣教が始まった頃、既に中国からやって来た竹飾りの風習(あるいはイスラム文化からも直接影響を受けていたかもしれません?)と融合して、クリスマスのパロルの伝統が形成されてゆきます。パロルは世界史の壮大な物語が、アジアの小さな島に残していった痕跡なのかもしれません。

この国のクリスマスは喧騒と派手な装飾のイメージで語られることが多いのですが、パロルの物語はそれだけにとどまりません。一九八五年はイザベラ州のタバコ産業の衰退から小作争議が頻発し、地主が雇った政府系民兵による小作村襲撃事件が発生しました。カトリックのインファンタ大司教は、教会への人々の往來の安全が守れないので、史上初めて「今年はクリスマスを祝うことが出来ない」という宣言を出し、世界のキリスト者を震撼させました。

それでもフランシスコ会の四人のシスターたちが、現地のココ椰子農園の中にある修道院を解放して、子供たちのクリスマス会を開くと言うので、私もマニラから参加しました。会場はかなり深い椰子の森の中であり、木々にぶら下げてある何十もの手製のパロルが道しるべです。「星に導かれて」ココナッツで作った「ご生誕のクリブ」まで導かれ、大変感動したことを思い出します。危険な時代でしたが、それだけにパロルの希望の光はより輝いて、この国の人々への神の愛を示していたようでした。

(司祭 遠藤雅也)



「悪い奴の明日に期待する」



主 教 小 林 尚 明

「悪い奴の明日に期待する」

十月九日(土)大聖堂で、八代学院主催「創立者ミカエル八代斌助主教逝去五十周年記念礼拝」が行われました。この礼拝は、昨年十月に予定されていたが、コロナ禍で今年に延期になってしまったのです。丁度、逝去二十五年に出版された永田秀郎著『跪くひと八代斌助』から引用しながら説教しました。

斌助主教の父欽之允は、明治二十六年秋田県から小学校長として、苦小牧から東へ約三十キロの鶴川(むかわ)に行きますが、そこで不幸な出来事に出会い、明治二十九年平取の聖公会にいらるバチエラーによりキリスト教信仰に入ります。そして函館の神学塾で学び、その地で明治三十三年三月三日、八代斌助は誕生します。大正六年、斌助十七歳の時、函館のラング宣教師の下で、一年間学びます。ラングの期待によって立教大学予科に入学しますが、授

業は退屈で、両国の出羽の海部屋通い、相撲にうつつをぬかします。母ヨシの死もあり、家計を助けるため青島に渡り、魚の行商などをしますが、生活が成り立ちません。たまたま入った聖公会の教会で、英国人エドワードに助けられ、その教会で聖書の講義やクリスマス礼拝も行いますが、日本に帰って、神学をもっと学ぼうように諭され、帰国します。

父欽之允は、リュウマチが癒えず、たまたま神戸地方部の傍ら、北海道地方部の管理監督(現在の主教になったフォース)に南国への転勤を希望し、高知聖公会への転勤が決まります。そして父に同行した斌助は、フォースの期待により、姫路顕栄教会の伝道師補に用いられます。一年後にやって来たバジル監督に斌助は、長老(現司祭)に叙任されます。そして、周りの斌助への批判を聞きつつも、バジルは斌助の将来を信じて、ケラム神学校に留学させます。

この説教を考え始めた時から、斌助主教の長男で、今年逝去三十年を迎えた欽一主教の『キリスト教というものは、悪い奴の明日に期待する宗教じゃ』の聲が、私の心に響いていました。若者たちの明日に期待する主教でありたいと思います。

(神戸教区主教)

神学執運営委員会主催 教役者・信徒セミナー

九月十八日(土)、十月十六日(土)、十月三十日(土)と、三回に渡ってオンライン(ZOOM)で「コロナ禍における教会・今をどのように生きるか」と題して教役者・信徒セミナーを行いました。

第一回目は與賀田司祭から「英国におけるパンデミックと教会」と題して、英国で経験されたロックダウンの実体とパンデミック禍の英国の教会の歩みや礼拝方法などについて紹介して頂きました。英国のロックダウンと日本の緊急事態宣言の内容の違いに多くの方が驚かれています。

第二回目は永野司祭から「神とパンデミック」から学ぶ」と題して、英国国教会のトム・ライト主教の著書から旧約聖書や新約聖書の中から「禍い」をどのように考えるのかを教えて頂きました。

第三回目は林司祭で、ドイツのカトリックの神学者クラウス・フォン・シュトツシユ師が書いた「神がいるならな

ぜ悪があるのか」という著書から神様をどのように捉え、苦しみをどのように考えるのかを教えて頂きました。



希望を持って、時には神様に嘆き、訴えながら、祈りを大切にしながら共に歩みたいと感じました。

三回のセミナーを通して、共通して出てきたのは「神様が共におられる」という言葉でした。コロナ禍で私たちは教会に集えないことや陪餐を受けることができないう等の苦しみや悲しみや制約の中を歩んでいます。そのような中にも神様が共におられ、神様も共に苦しんでおられるのです。私たちには、いつも近くに神様がおられ共に歩んでくださっていることを忘れず、



神学執運営委員
司祭 杉野達也

鳩だより 《敬称略》

祝 堅 信

十月十日(日) マリア 村 上 みゆき 神戸聖ヨハネ教会

十月二十四日(日) ビー ド 藤 田 浩 二 富岡キリスト教会

十月三十一日(日) アントニオ 豊 田 稔 人 福山諸聖徒教会

ご 逝 去

八月一日(日) 司祭アンデレ 松 尾 常 雄 神戸教区出身・勤務、ブラジル聖公会退職聖職

1月の教区関係教役者 逝去記念聖餐式

日時 2022年1月6日(木) 午前10:30
場所 神戸聖ミカエル大聖堂
司式 主教 小林 尚明
説教 司祭 上原 信幸

※中止の場合がございます。恐れ入りますが、ご出席される方は、事前に教区事務所までお問合せ下さい。よろしく願い致します。教区事務所 TEL.078-351-5469

* 1月の記念逝去教役者

Table with 4 columns: Date, Role, Name, and other details. Lists memorial services for various clergy members throughout the month of January.

十月十八日(月) ユニケ 牧 岡 弘 子 神戸聖ミカエル教会

アンデレ 戸 塚 政 昭 岡山聖オーガスチン教会

十月二十三日(土) マリア 松 野 裕 子 松山聖アンデレ教会

瀬戸内伝道区

二〇二一年十月十六(土) 十時三十分〜十二時過ぎにかけて、瀬戸内伝道区各教会礼拝堂にて、初のリモートでの伝道区信徒修養会が開催されました。今回の修養会では開会礼拝の後、宮田裕三執事を講師にお迎えして、「インターネット環境を用いた礼拝や集会の展望」と

いう主題の下でお話を聞きまし。インターネットを介しての礼拝・交流は新鮮で、講話は参考となり、良き学びとなりました。約二十名参加。(司祭平野一郎)

クリスマスおすすめ文庫

今回はクリスマスに関する本を紹介したいと思います。たくさんの方のパーティー等が許されない今、一人静かにクリスマスをお過ごし時のお供になればと思います。(司祭坪井 智)

『クリスマス音楽ガイド』 クリスマス・シリーズに歌いたい音楽五十選

川端純四郎・関谷直人編著 キリスト新聞社

クリスマスは「歌の祭り」と言

えます。このご時世、クリスマスキャロルを歌えるか微妙ですが、だからこそ解説を読んで気分だけは高めたいものです。聖歌・賛美歌を中心に、クリスマスに関わる有名なクラシックまで、コンパクトに解説されています。また曲順が教会の暦に従い並べられていますので、教会の時間軸にしたがってクリスマスの意味を学べます。付録として、解説された曲が入ったCDが付いています。目だけでなく耳からも楽しめる様になっています。

『ベツレヘムの星』

アガサクリステイ 早川書房

名探偵ポワロシリーズなどで有名な推理小説作家アガサ・ク

リステイが記した心温まる短編集で、ミステリー物ではありません。クリスマスにまつわる出来事を題材に短い物語や短い詩十一編で構成されています。物語の最後には、ほろりとしたオチが付いているところなど、推理小説作家らしい一面をのぞかせています。

『クリスマス十二のミステリー』

アイザックアシモフ 新潮文庫

SF界の巨匠アイザック・アシモフが編著した短編集です。内容はSFではなく、むしろクリスマス由来の出来事やクリスマスイベントに絡んで起こる様々な事件を爽快に解決していくミステリー仕立ての小品です。とはいえ、色々なクリスマスの習わしが物語の根底に潜んでおり、謎解きすることでクリスマスやキリスト教の文化に触れることができます。もちろんクリスマスの豆知識がなくても十分に楽しめる一冊です。

